

# まんだら通信

第213号 (通巻248号)

平成26年03月 西暦2014年 佛曆2580年 皇紀2674年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高樞 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org



城山(じょうやま)から見た、房総半島最南端の野島崎灯台。  
良く晴れていれば、水平線は八丈島や三宅島が見えます。

## もらい、あたえ、もらう

今月の標題は、たまたま手にした、曾野綾子さんの『戒老録 自らの救いのために』の始めの方にある言葉です。  
人間は誰でも、幼い時はオッパイを飲ませてもらい、ランドセルを買ってもらい、学校に行かせてもらう、このような『もらう』時期が二十年以上続いた後、社会に出ると結婚して家庭を持ち子供を教育し、親の面倒を見、税金を納めて国のお役に立つというように『与える』立場に廻りますが、やがて老いれば、子や孫や世の中から手助けしてもらおう、という『もらう』立場になります。

曾野さんは言います。  
「誰かが何かを与えてくれるのが当たり前と考えている人は、年齢に関係なく近ごろ多くなつたように思う。与えることをせずに、もらうことばかり考えている人は、たとえ二十歳でも、老年というべきではあるまいか」と。

先日の大雪で交通が途絶え、山梨や群馬などで、孤立した集落があちこちに出ました。山梨県甲州市の過疎の集落で、六日ぶりに開通した林道を、救援物資や新鮮な野菜を積んだ車がやってきました。マイクを向けられたお年寄りが「きれいな空気と景色の良さが気に入って、七年前に引越してきましたが、これほど心細かつたことはありません。行政は、今後このような不安がないようにしてもらわないと困ります。」と言いました。

有難うございました、というお礼の言葉が聞けると思っていた私は、ポカンとしてしまいました。七十歳過ぎのご夫婦ということでしたが、まるで子供の言い草ではありませんか。  
雪を知らない私には想像できないような、雪崩やがけ崩れの恐れ、寒さなどと戦いながら道を開いてくれた人たちへの感謝の気持ちがあれば、自ずから違う言葉が口から出たはずだ。

曾野さんがいうように、してもらうのが当たり前という人が確かに多くなりました。  
たとえば生活保護は、確かに国民の権利ですが、出来るだけ他人様のご厄介にならないようにと、生活を建て直す努力をしたものです。  
ところが近ごろは、自分から働くことをせずに、くれるものならもらわなければ損とばかりに、要求する人がいます。

安がけないようにしてもらわないと困ります。」と言いました。  
「あの人はいつもああやっているのだとすると、あの乞食さんの方がお金持ちになつてしまいませんか。」アンギーさんは「はい、センセイ。そうかも知れませんが、みんなは仏さまがお喜びになる善行をしているのですから、幸せなのは自分の方なんです。」と。

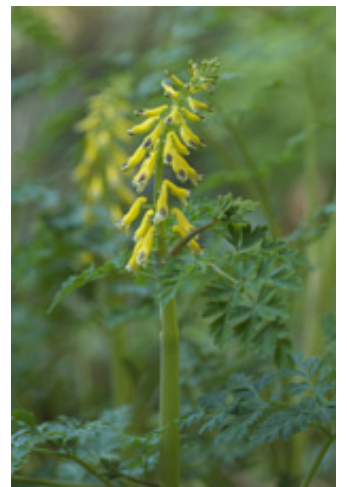
曾野綾子さんの、身体の不自由な老婆もバスのお客さんも、相手が喜ぶことで自分が幸せになるということでは同じですね。つまり、相手が喜ぶことが自分の本当の幸せ、ということの時々思い返しておくことが大事で、身体の自由さやお金のあるなしや年齢とは関係ないことなんですね。  
私も今年の誕生日で満八十歳。  
自分の年齢をいいことに、知らず知らず『年寄りなんだから』してもらって当たり前』になっているのかも知れません。  
でも幾つになっても出来るだけ『与える』側にいたいものだ、と自分に言い聞かせているのですが。

## 余滴

▼春三月、弥生月。毎日真冬並みの寒さですが、もうすぐ水ぬるむ本当の春が、すぐそこまでの予感がします。「春は名のみ…」の『早春賦』が口をついて出ます。ウグイスも、去年覚えた歌を確かめるように鳴いています。▼『パンドラの約束』というアメリカ映画をインターネットで知りました。環境保護のために原子力発電に大反対だった監督が、勉強を進めるうちに、原子力発電こそ地球を守るために必要ということが分かったという映画だそう、見に行こうと思っています。4月19日(土)～5月2日(金)渋谷区宇田川町13-17ライズビル。

▼昭和20年3月10日は所謂東京大空襲の日ですね。下町の木造住宅密集地に、そのために開発した焼夷弾を雨のように降らせました。死者行方不明者は、10万人以上と言われます。日本人は「水に流す」民族ですが、相手の罪まで許して忘れるわけではありません。▼安倍首相が靖国神社にお参りしたことで、中国・韓国などが言いがかりをつけています。ケネディ駐日大使が(参詣に)失望したと言ったそうですが、根も葉もない言いがかりをつけている相手に言ってもらわなければ、日本人の誇りは傷つくばかりです。ライシャワーさんとまでは言わなくても、同盟国の大使なら日本と中国

・韓国の歴史を、もう少し勉強してもらい必要があります。▼そして3月11日は東日本大震災の日ですね。復興が進まない一番の根っこは、学問上は答えが出ているのに、「放射能怖い病」が邪魔をしているからだと思えます。一番いい解決の方法は、国会議員が住んで見せるってどうでしょう。住民票まで移動せずとも、方法は沢山ある筈です。▼今月の野草は【ケマンソウ科キケマン属】数年前、畑集落の林道で、4月に写したキケマンです。ケマンは華鬘で仏さまの飾り。色が黄色のケマンソウです。 2014/03/08 龍渉





# につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊 (ほうほう)

## 第九十八話 女優

皆さん、最近、なんだか若い女優さんが一気に増えてきたと思いませんか。テレビドラマを見ていても、コマーシャルを見ていても、顔は知っているけれど名前のわからない女優さんたちの多いこと。若年性アルツハイマーのせいでしょうか。

そうしたなか、今年の一月に私がよく知っている一人の老女優が亡くなりました。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、淡路恵子さんです。そうですね、『社長漫遊記』などのコメディ映画では、バーのマダムとか芸者とか、よく出ていました。若い方はご存じないかもしれませんが、享年八十歳でした。

実は私、生前、淡路さんに結構親しくしていただいて、いっしょに何度も食事なんかした仲なんです。ふだんの淡路さんって、いかにも東京のおばあちゃんという感じで、赤い野球帽に青いジャンパー、ジーンズにスニーカーというスタイルで、都営のバスに乗って、私との約束の場所に現れました。

「あなたって、愉快な方ね。あなたなら、気楽にいろいろ話せるわ」と若い時のお話から、萬屋錦之介さんとのなれなれ、借金地獄の苦しみ、病魔、さらには必死の介護のおかげで錦之介さんが奇跡的に治ったあと、別の女優さんのところに行ってしまった話など、食事をしながらサラッと話してくれました。

ただ、ひとつだけ、約束がありました。それは、「あなたに話したこれまでのごことは、私が生きている間は誰にも話さないでね」ということでした。「え、もちろん、話しませんよ。でも、それって、僕

しか知らないことなんですか」と私もあわてました。

「なに、ビビってるのよ。取って食うっていうんじゃないし、あなたの家庭を壊そうとしているわけじゃないでしょ。ただね、私ね、思ったのよ。人間ってね、誰かひとりだけでも、真実を知っている人がほしいものなのね。だって、そうでしょ。私か死んだら、みんな勝手なことを言うじゃないの。特に、私がこんな仕事をしているからさ」

「はい、わかりました。じゃあ、お亡くなりになったら、話してもいいんですか」「どうぞ、どうぞ。ぜひ、本当の私を伝えてくださいな。」

それからしばらくして、淡路恵子さんが入院され、半年後の今年一月にお亡くなりになったというわけです。私には、まだ淡路さんのあの低いハスキーな声が耳に残っています。そして、「どうぞ、どうぞ」と言った時の少女のような笑顔が目につかびます。

その言葉に甘えて、このページにふさわしい話をご紹介します。

それは、淡路さんの四男、井田哲史君との話です。淡路さんは、東映のスター萬屋錦之介さんと結婚する前に、フィリピン人歌手ピンボー・ダナオさんとの間にふたりの男の子がいました。そして、錦之介さんと結婚してまたふたりの男の子が生まれたのです。

ですから、錦之介さんと結婚当時は、それは楽しかったそうです。神奈川県・藤沢の大邸宅には大きなお風呂があって、人浴後は錦之介さんを先頭に、四人の男の子たちが「ふるちん」で行進してきては、淡路さんを喜ばせてくれたそうです。幸せが目に見えそうです。

萬屋錦之介さんのもとと歌舞伎の出身ですから、哲史君も子供の頃は萬屋吉之亮という芸名でNHKの大河ドラマ『毛利

元就』に出演し、将来を嘱望された子役のひとりだったのです。ところが、お父さんの中村プロダクションの倒産、さらには錦之介さんの強烈なストレスによる筋無力症などが重なり、一家の生活は激変します。それまで裕福だった暮らしが一変すると、一番心に痛手を受けるのは子どもたちなんです。

しかも、まだお父さんがそばにいればよかったのですが、奇跡的に快癒した錦之介さん、しばらくして家を出て行きました。そして、あろうことか、他の女優さんと結婚してしまつたのです。淡路さんは言いました。

「私はいいんです、嫌われたって。しかたがない。でも、子どもたちのショックはどれほどだったか。錦ちゃん、あなたは、自分の分身をふたり捨てたのよ。あのときは本当にいけないことをしたと思いますよ。」

淡路さんは離婚後、バーのママになります。今度は、役柄ではなく本物の。三男がバーテンダーをしながら手伝つてくれていたのですが、この子がまもなく交通事故で亡くなりました。

そして、哲史君です。父親の裏切りからおかしくなつた彼は、高校を中退後、家庭内暴力を繰り返したため、知人を通じて京都のお寺に修行に入ります。ですが、いったん荒れた心は静まりません。酒を飲み、お寺の仏具を盗んだ罪で逮捕されてしまいます。そして、懲役一年六カ月、執行猶予三年の判決。

本来なら謹慎の身はずが、金に困つて、あろうことか淡路さんの部屋に侵入し、金を盗もうとしたところを淡路さんに発見されます。淡路さん、迷つたでしょうねえ。でも、心を鬼にして、警察にわが子を突き出した。「今度こそ、更生してくれるのよ!」と心で泣き叫びながら、逮捕されるわが子を見送つたそうです。

そして、その哲史君が出所した。さあ、どうなつたと思えますか。

哲史君、お母さんに電話を入れた。「お母さん、哲史だよ」「哲史!、元気なの!」「ああ、元気だよ。そうそう、お母さん、いまお芝居に出ているんだって? 僕、見たいなあ、お母さんのお芝居」「え、見てくれるの!見て、見て。いつがいい。チケット、入口に用意しておくから。見終わったら、楽屋に来るのよ。おいしいもの、久しぶりにふたりで食べようね」「うん、じゃあ、行くね。僕も楽しみにしてるから」もう淡路さん、うれしくて、その晩は涙が止まらなかつたそうです。そして、哲史君が芝居を見てくれる約束の日の二日前、電話がありました。

「淡路さんですか、哲史君がドアノブに首を吊つて自殺しました」と。その話をしてくれた後、淡路さんは涙を拭きながら、私にこう言いました。「今度、生まれ変わったら、私、デブでも、しわくちゃでもいい、貧しくてもいい。ごく普通のお母さんになりたい!そして、子どもたちをギョツと抱きしめてあげたい。ああ、もう一度生まれ変わりたいなあ……」

生まれ変わらなくても、きつと、向こうで哲史君と抱き合っていると思いますよ。え。

インド古典音楽  
**サントウール・タブラ コンサート**  
 2014年スプリングツアー

インド古典音楽は、悠久から融合しあう心と心から生まれ即興で奏でられる音楽は、人種や思想を越え繋がり合う!



タブラ演奏者 原口順  
 サントウール演奏者 安藤真也

タブラ 北インドの打楽器。高音と低音の2つの太鼓を指と手の平で演奏する。多彩な音色を出す。  
 サントウール ヒアノの原型楽器。91本の弦をバチで叩いて演奏する。繊細な美しい音色を出す。

インド古典音楽コンサート

日時 4月13日(日曜日) 午後3時より  
 会費 2,000円  
 演奏 タブラ 原口順  
 サントウール 安藤真也

水ぬるむ4月の昼下がり  
 おなかの底に響くインド音楽  
 ご期待下さい

今月も、MOKU出版と、このエッセーをお書きになった三遊亭鳳豊師匠のご好意で転載させていただきました。聞いてみれば、はた目には分からない辛いことの多い世の中なんですね。淡路恵子さんの声や、お人柄が目に見えるようです。